

中核にある空虚

—*The Secret Agent* におけるアナキズム再考—

高橋 諒

Abstract This essay focuses on the key word "anarchism" in Joseph Conrad's *The Secret Agent*. The etymology of this word is composed of the Latin word "an" (no) and the word "arch" (centre), which allows the word "anarchism" to be reinterpreted as "lack of centre." If we interpret this word in this way, this text turns out to be littered with images and rhetoric that suggest 'lack of centre' as various linguistic figures. The inversion of various dichotomies without any semantic conclusion and Stevie's "concentric circles," linguistic figures that never seem to reach their centre, are the most obvious examples. These elements are significantly linked to the characters' inability to get to the heart of the truth (the thematic centre of the text). Such 'nothingness' is associated with Conradian nihilism, suggesting an affinity with Nietzschean philosophy. While Nietzsche attempts to overcome his nihilism, Conrad redramatises it in such a way as to foreground his 'nothingness' as an unconscious intensity latent in the human psyche. Driven by this, the meaninglessness of the characters' destructive actions manifests itself. It is only through such negative acts that we can recognise the overwhelming presence of the Nothing, which Nietzsche and Freud could only call 'das es.'

はじめに

ジョウゼフ・コンラッドの *The Secret Agent* (1907) はアナキズム (anarchism) を主題としている。つまり、無政府主義者たちによる社会変革の試み、あるいは、彼らのグリニッジ展望台爆破計画に巻き込まれる人物たちをめぐる物語であると、この小説を要約することができる。これまでの研究では、アナキズムについての哲学的な考察や歴史的な論考をはじめ、実に多岐にわたる考察がされている。しかし、その一方で、anarchy という鍵語の語源

については十分な注意が払われてこなかった。この言葉の語源は“an”(ない)という否定辞と、“arch”(支配者)というラテン語で構成されている。文脈によって、この「支配者」を政治的中心人物と解釈することも可能である。実際にテキストは、おそらくは内務大臣と目される人物の国会議事堂内の執務室を「帝国のまさに中心 (the very centre of the Empire)」と表現し、この「大物 (the great Presence)」を“The Chief”と秘書に呼ばせている (169)。各種英英辞典が、この語の語源を説明するに際して、arch を chief と英訳していることがここで注目される。このように、コンラッドはアナキズムの語源的な意味に意識的であると想定することが可能である。その想定からして anarchy という語は、この作品にあって語源的な含意を唆しながら「中心の欠落」という意味を帯びていると考えることができる。主題的な水準からしても、国内の政治犯の捜査をする治安組織の中心にいる者たちの機能不全が作品の関心事となっている。それと同時に、このように再解釈した anarchy という単語の語源的な意味が、この作品において様々な言語的形象として「中心の欠落」という主題やレトリックを組織している。本論文では、このような立論から、*The Secret Agent* を「中心の欠落したテキスト」として再解釈し、これまで十分な議論の対象となっていない箇所の意味を問いたい。

内と外の反転、あるいは中心の欠如

物語の主要人物アドルフ・ヴァーロックはダブルスパイであり、ロシア側のスパイとして大使館に従事しているのと同時に、英国側の警察組織にも協力している。それゆえ、ヴァーロックはロシア側では英国のスパイを、英国側ではロシア側のスパイをするという二重生活をしている。ペンギン版の *The Secret Agent* のイントロダクションで、マイケル・ニュートンはこのような二面性を持つ生活について次のように論じている。

The Secret Agent always snags on the relationship between interiority and the external, whether in the relationship between Britain and the rest of the world, the surface of the body and the silent life within or the street and the domestic space. Conrad coyly terms pornography ‘shady wares’. These books and photographs combine the hidden (in terms of the conditions of writing,

publication, sale and consumption, all as anonymous as possible) and the exposure of what social taboo conceals. (xxii)

ニュートンは、ポルノ写真を販売するというヴァーロックのビジネスに関して「内と外」という側面に注目する。ポルノ写真に関して言えば、その販売、消費は秘密裏に（秘かに内側で）行われるのと同時に、社会的タブーが隠していることを暴露する（外側に出す）という意味で、そこでは「内と外」が同居したものであるという論点がここで提示されている。このような視点から、ポルノ写真の販売といったヴァーロックの生活を考察すれば、表層としての外側と深層としての内側といった正反対のもの、つまり公私が反転していると論じることができないだろうか。例えば、ポルノ写真とは、プライベートたる内側に隠すべき裸体をパブリックな外側へと露出するものである。つまり、そこにおいて内側を見ると外側に露出された身体が見え、外側を見ると内側に秘すべき裸体が露出しているというように、いわば内と外とが反転しているのである。後で見るように、この小説の主題的欲望は、外側から内側にある真実を見るということにある。しかし、このように内と外が反転してしまえば、この主題は破綻をきたすことになる。言い換えれば、内側にはすでに外側に露出したものがあり、そこには探すべき「内なる」真実など存在しない。つまり、物語の「中核」に想像される内なる真実はそこにはない。これは「中心の欠如」というテキストの主題と無関係ではないだろう。

この点から、ダブルスパイという存在のあり方についても考えてみたい。もしヴァーロックが単純にロシアのスパイであるのなら、彼は、外側ではイギリス国民、しかし内側ではロシアのスパイというように表現することができるだろう。しかし、ダブルスパイである彼は同時に、ロシア大使館において外側から見ればロシアの協力者であるが、内側ではイギリスの警察組織の協力者でもある。彼の存在の様式を「内と外」というレトリックによって表現すると、このように再びその反転という主題が見えてくる。これを言い換えれば、ヴァーロックの「内側」に真実を見ることは、このレトリックの構造上不可能である。つまり、彼という存在の中核は一種の空虚あるいは欠如と化す。

さらに注目すべきは、マイカリスというアナキストの一人が“ticket-of-leave” (仮出獄)であるということだ。“ticket-of-leave”という語はテキスト内で何度も強調されている。監獄の中にいるべき人物が外出することを法が認めていることになる。このように刑務所という空間において、内側にいるべき人物が、法的に許可されて外側に出ているという事態は、「内側＝罪/外側＝潔白」という差異を曖昧にしている。この意味で、監獄の内と外がいわば反転しており、ここでも内側には真実がないというテキストの主題的関心を見ることができるだろう。

繰り返して言えば、テキストが内側に探求すべき真実がそこにはない、つまり内側の真実の欠如ということがここで見えてくる。これは、先に述べた *anarchy* という言葉の語源的な意味を彷彿とさせる。テキストの中心を成すと想定される真実それ自体が機能せず、真実があるべき中心は一種の空白となっているのである。

この点から、ウィニーがこれを具現化したような人物であることは注目に値する。“She felt profoundly that things do not stand much looking into. She made her force and her wisdom of that instinct” (141)とあるように、彼女は物事の深みを見ることを拒絶している。このように、ウィニーの深みを探る行為を拒否する態度には、いかなる洞察をもってしても深層からは何も得られない、あるいはそこには何もないという彼女の信念が示唆されている。

この連想から同様に重要なのは、グリニッジ展望台を爆破したテロリズムに対する調査官が、繰り返し“Chief Inspector Heat”と呼ばれているという事実である。この調査官は、事件の真実を明らかにすることが期待されている人物であるのは言うまでもない。“inspect”という単語は“in” (中)と“specere” (見る)というラテン語から構成されており、「中を見る」というのが本来的な意味である。これはウィニーにおける“look into”というフレーズと意味深く対応している。しかし、彼は裏で繋がっているヴァーロックを庇うために“I don’t account for it at all, sir. It’s simply unaccountable. It can’t be explained by what I know” (106)と嘘をつく。真実を解き明かすべき主任調査官が事件をやむやにしようと試みているのだ。アナキスト摘発の中心人物たる Chief Inspector であるヒートは、このように機能していない。つまり、治安組織の中核にいて事件の中心を見抜くべき捜査官が機能していないという事態は、

この物語の語源的な定義からしてアナキズムに貢献していると言える。つまり、彼の職務放棄が、物語＝テキストの中核の欠如、あるいは空虚と意義深く関連しているのである。主任調査官の無能性は英国の警察システムの中核において何も機能していない、中心には空虚があるという読みを可能にしている。

ここで、グリニッジ爆破未遂事件の実行犯であるスティーヴィという登場人物に注目したい。彼は“inexplicable character” (44)であるとヴァーロックから言われている。ここで興味深いのは、スティーヴィが無数の同心円や離心円を描いているということだ。

Mr Verloc, getting off the sofa with ponderous reluctance, opened the door leading into the kitchen to get more air, and thus disclosed the innocent Stevie, seated very good and quiet at a deal table, *drawing circles, circles, circles; innumerable circles, concentric, eccentric; [...]*. (36; 強調は筆者による)

“concentric”、つまり同心円を無数に描くという行為が意味するのは、どのようにこの行為を反復しても、円の中心には到達できないということではないだろうか。さらに、“eccentric”、つまり離心円も「中心からずれる」、 「中心から離れる」円であるため、彼は中心からそれた人物であるという暗示をここに読むことが可能である。言い換えれば、ここにおいても中心へ到達することの不可能性が示唆されている。

さらに、ヴァーロックはスティーヴィについて “Mr Verloc cared nothing for Stevie’s excitement, but he felt horribly wakeful, and dreaded facing *the darkness and silence that would follow the extinguishing of the lamp*” (46; 強調は筆者による) というように感じている。彼はスティーヴィの“excitement”を気にしてはいないものの、自分が用心深くなっていることを感じ、ランプが消えた後の部屋を訪れるであろう暗闇と静寂に恐怖している。つまり、目に見えている間は恐怖心を抱いてはいないものの、視覚を奪う暗闇と“inexplicable character”たるスティーヴィが重なり合うことを恐怖しているのではないだろうか。そのように理解を超えたスティーヴィを、ヴァーロックは「darkness を恐れている」という比喻形象を通じて表現している。つまり、“excitement”な状態のスティーヴィについてヴァーロックは、

darkness という言葉でしか彼の内面を表象できないでいる。ここで想起されるのは、“Heart of Darkness”と同様の修辞学であろう。この連想からすると、闇の奥には空虚しか存在しないという表象が *The Secret Agent* から読み取ることができる。これら二つの物語において、darkness という表現は空虚、つまり nothing を指し示している。同心円や離心円の反復は、円の中心を強迫的に目指してはいるものの、その行為それ自体に終わりがないため、中心に到達することの不可能性、つまり中核の空虚さを暗示している。さらに言えば、スティーヴィの心の中たる darkness は、彼の内面をある種の空虚として表象している。

ここで、スティーヴィの死後、どのような描写があるのかについて注意を向ける必要がある。ヴァーロックに命じられ、彼は爆弾を抱えながらグリニッジ展望台へと向かうが、誤爆し死亡する。その亡骸の様子は繰り返し“fragment”と繰り返されるが、ここにおいては内側にある臓器や魂と言ったものが外側へと露出しており、内と外との区別ができなくなっている。この箇所においても、先に述べた「内と外」をめぐるマイケル・ニュートンの議論が想起される。また、強調すべきなのは、スティーヴィの亡骸は警部であるヒートに“person unknown” (71)という言葉で処理されている点である。これが意味するのは、人の肉体が人のアイデンティティ（内面）を指し示していないという事態である。何も意味することがない彼の亡骸もまた、彼の内部の nothing を剥き出しにしている、ということができないだろうか。

重複する空虚

さらに重要なのは、“Enormous hole in the ground under a tree filled with smashed roots and broken branches” (56-57)という箇所である。スティーヴィの死後、そこには大きな穴が空いている。グリニッジ展望台は世界の標準時とされている点で、当時の世界の中心と考えることも可能である。つまり、ここで二重の意味でアナキズムの語源を連想させる形象を指摘することができる。一つ目には、世界の中心に穴を開けたということ、つまりある種の空虚を世界の中心に穿ったと解釈できる。二つ目には、本来意味を持つはずのテロリズムが失敗に終わり、真実が解明されることなく処理さ

れているということ、つまりこのアナキズム的行為それ自体が空虚であるということである。したがって、我々は二種類の空虚に遭遇することになる。繰り返せば、世界の中心の穴と、テキストの中心テーマであるアナキスト的行為それ自体が空虚であるということがここで明らかとなる。このように、*The Secret Agent* におけるアナキズムは、単に政治的な思想や行為を指し示すに留まらず、語源的な意味、つまり中心の欠落という形象を、テキストに繰り返し刻印しているのである。

同様に興味深いのは、スティーヴィの謎めいた行動である。これもまた、中心の欠落を示唆している。物語の冒頭で、スティーヴィが働いている時に、彼が制御不能に暴力的になる場面がある。

When he had reached the age of fourteen a friend of his late father, an agent for a foreign preserved milk firm, having given him an opening as office-boy, he was discovered one *foggy afternoon*, in his *chief's absence*, busy letting off fireworks on the staircase. (8; 強調は筆者による)

花火に点火する行為は、スティーヴィのグリニッジ・パークでの最期を予兆している。彼はこのように突発的な暴力性に支配されており、全知の語り手は“Stevie did not seem to derive any personal gratification from what he had done” (8) というように説明している。彼のこの行為の動機は、仲間の少年たちが、ありもしない不正な行為や迫害の話をして彼を興奮させたからだと言われているものの、彼は行為の後でも満足感を得ていない。さらに言えば、“Winnie maintained that he was much less “absent-minded” now” (130) という箇所があり、彼には思考が欠落した（心の中が不在な）状態が過去に幾度となくあったことが暗示されている。花火に点火するこの場面は、“chief’s absence” という状況でもあった。会社の中心人物がいない、言い換えれば組織の中核がまさに不在の時に空虚な事件を起こしたということは、空虚の中に空虚が重複している同心円の構造を再度示唆していないだろうか。したがって、何かアナキスト的行為が行われるとき、*The Secret Agent* というテキストは、*anarchy* という言葉の語源的な意味に過剰なまでに意識的であるということが可能である。

また、*anarchy* という言葉の語源的な意味は *The Secret Agent* におけるロ

ロンドンの描写においても重要である。アナキストであるヴァーロックはロシア大使館と呼ばれるのだが、その時に彼は“*They [citizens] had to be protected; and their horses, carriages, houses, servants had to be protected; and the source of their wealth had to be protected in the heart of the city and heart of the country; [...]*” (10; 強調は筆者による) というように感じている。強調すべきは、ロシア大使館がロンドンの中心に位置しているということである。大使館というのは治外法権の空間であるというのは言うまでもない。言い換えるならば、英国の中心には外国が存在しているということになる。これもまた、テキストが繰り返して示唆している語源的なアナキズムの例として見なすことが可能ではないだろうか。ロンドンの中心にはロシアという異質なものがある、という点で英国の中心に外部が存在しているのであり、これは中核の空虚＝欠如という点からして、アナキズムの語源をふたたび連想させる。

それに加えて、ロンドンには誰も真実を突き止めることができない場所としても表象されている。なぜなら、*The Secret Agent* では常にロンドンは fog や mist に覆われていると語られているからである。視界が遮られており、*impenetrable* な状況である。ステイーヴィが花火に点火したのも、“*foggy afternoon*”での出来事であった。そして物語の終盤、失敗に終わったテロリズムは新聞の見出しで“*An impenetrable mystery seems destined to hang for ever...*” (242; イタリアック体原文) というように説明される。このテキストは、視界の届かぬ内部にいかにも真実が存在するというように物語を展開しながらも、そこにはいかなる意味も存在しないことを複数の形象で暗示していることになる。

過剰な否定性

マイケル・ジョン・ディサントによれば、ステイーヴィの描く同心円はニーチェ哲学をモチーフにしているのだと言う。

That Stevie stops drawing circles is another allusion to Nietzsche's idea of eternal recurrence. Nietzsche's idea is that a person must will all things exactly the same, without change, which means willing all the suffering in humankind yet again. Though coming from different intellectual directions, Stevie and

Nietzsche arrive at the same place. At the end they both stop drawing circles. Through Stevie, Conrad suggests that Nietzsche could no longer affirm the idea of eternal recurrence and the joyful repetition of all suffering. (222)

ここで彼は、スティーヴィの同心円はニーチェの永劫回帰のアレゴリーであるということを指摘している。ではここで、ニーチェの永劫回帰について具体的に見ていきたい。

万物は行く、万物は帰る。存在の車輪は永遠にめぐっている。万物は死ぬ、万物はふたたび花咲く。存在の年は永遠にめぐっています。

万物は砕かれ、万物は新しく組みあげられる。同じ存在の家が永遠に建て直される。万物は別れ、万物はふたたび挨拶をかわしあう。存在の円環は、正確にそのままです。(375)

『ツァラトストラかく語りき』の中で、ニーチェは上のように永劫回帰について語っている。永劫回帰は、ニヒリズムに陥った人間に対する救済として彼が提唱したものである。その意味で、真実は存在しない、中心にあるのは空虚ばかりであるというコンラッドのテキストの虚無性は、ニーチェが克服を試みたニヒリズムとも通底している。*The Secret Agent* において、田尻芳樹の言葉を借りれば「コンラッドがニーチェをパロディーしているのは明らか」(8)である。つまり、これまで見てきた過剰なまでの虚無、圧倒的存在感のある虚無は、ニーチェ的なニヒリズムを継承していると見なすことが可能ではないか。これを言い換えれば、コンラッドはニーチェが克服しようとしたニヒリズムをアナキズムの語源を連想させる形象を通じて主題化していることになる。ディサントは円を描くことを止めることにそれを読解するが、本論ではむしろこの行為の過剰な反復を強調しておきたい。

ニーチェ的ニヒリズムの表象という意味で *The Secret Agent* において重要なのは、物語の中心的な出来事である無意味に終わった爆弾テロ事件である。この動機不明な行為について考察するため村瀬暁生の論考に言及したい。

さらにウラジミールの言うところによると、今までのテロ活動は全て新聞に説

明されてしまい、誰もが容易に納得できるものになってしまっている。要するにジャーナリズムによって、テロリズムという枠組みに分類されてしまうのである。例えば王族や大統領の暗殺といった事柄も、すでに人々にとっては馴染みの出来事であり、どんな新聞でもその行為について適当に説明してしまうフレーズを考え出してしまうだろう。そんなことでは駄目であり、世間の人々に本物の恐怖を与えなければならないのだ。そのためには、たやすく説明づけができないような、全くの意味を欠いた破壊活動が目指されなければならない。

(154)

村瀬が指摘するように、ウラディミールは人々に本物の恐怖を与えたがっているのだが、そのように考える彼の動機は不明なままである。破壊行為を命じられたヴァーロックも意図を理解できないまま保身のため、抗うことができずに従う。その爆破計画の中で、プロフェッサーなる人物が爆弾を作るのだが、彼は群衆の中に紛れている時、“What if nothing could move them [crowd]?” (65) というように心の中で嘆く。これは一般的な訳では「何も彼らを動かすことができなかつたとしたら」のようになる。しかし、今まで議論してきた意味での **nothing**、つまり中核の空虚という観点からこの箇所を解釈してみたらいかなる点が明らかになるだろうか。その場合この陳述を「中核の空虚が彼らを動かすことができたとしたら」のように解釈可能である。このような視点から再読すれば、ヴァーロックやステューヴィによる意味の欠落した行い、ウラディミールの動機不明な指示は、この **nothing** というある種の否定的な力によって駆動されたのではないか、という疑問を発することができる。

人間を駆動させる抗うことのできない力を、無意識的な強度と呼ぶことができるかもしれない。互盛夫の議論を参照したい。

自我の中にも無意識的なものがある。言い換えれば、抑圧されたものの他にも無意識的なものがあり、それが抑圧と抵抗を行っている。そうしてフロイトは「抑圧されていない無意識」を想定せざるをえなくなり、その名称として「エス」を採ったわけである。(17)

互が言うように、フロイトはこれをエス (**das es**) と呼んだ。エスというのはドイツ語で、英語でいう **it** にあたる代名詞である。この無意識的なエス

とは、言語表象不可能な否定性の強度であるため「それ」としか呼ぶことができない。

それは思想というものは、「それ」が欲するときだけにわたしたちを訪れるのであり、「われ」が欲するときを訪れるのではないということだ。だから主語「われ」が述語「考える」の条件であると主張するのは、事態を偽造していることになる。<それ>が考えるのである。(51-52)

興味深いのは、フロイトがエスという語を用いたのは、「それが考える」というニーチェの『善悪の彼岸』での一節を採用したからだと、互が指摘している点である。つまり、自我の内部には「それ」としか呼ぶことのできない過剰な空虚、あるいは強烈な否定性しか存在しておらず、自我は不在であるということになる。ニヒリズムというテーマにおいて、自我の存在意義を思考するとき、自我が直面するのは、内面における自我の不在という問題である。自己の中核には自己が存在しないということもまた、anarchy という語の語源的意味と通底する。これを言い換えれば、自我の中核には言語化できない非自我が存在しているのだ。ここで再び互を引用すれば、「自我はエスの欲求と外界の調整を行い、その範囲内でエスの目的を果たそうとするが、エスは自我に快だけをもたらすわけではない」(110)ため、「それ」が自我とは無関係に思考し、人間を理解を超えた無意味な行動に駆り立てる。自己の中心には制御不能で表象不能な強烈な否定性たる虚無があるという事態と、その虚無が過剰な力を持っているということを考慮すると、これをある種の欲動と呼ぶことができるだろう。欲動的な虚無、自己の内面に宿るエスは、コンラッドの言語では過剰かつ無意味に人を駆動する無として作用している。

The Secret Agent の Authors' Note でコンラッドは、実際に起こったグリニッジ展望台爆破未遂事件について次のように論じている。

For perverse unreason has its own logical processes. But that outrage could not be laid hold of mentally in any sort of way, so that one remained faced by *the fact of a man blown to bits for nothing even most resembling an idea, anarchistic or other*. As to the outer wall of the Observatory it did not show so

much as the faintest crack. (249; 強調は筆者による)

コンラッドは動機不明なこの事件について、虚無＝nothing ゆえに爆死してバラバラになった男の行為が、“anarchistic”あるいはそのほか類似の思想に似るということを、ここで語っている。アナキストたちの行為に対して批判的な立場を取りつつ、コンラッドは、彼らの起こしたテロリズムは単に実りのない行為であるのではなく、ある種の虚無を我々に見せつけているのだ、と強調している。つまり、コンラッドは無意味に終わった事件とアナキストたちの思想との親和性を見出していることになる。そして、「倒錯した非理性（理由）にはそれ固有の論理がある」が、それを心の問題として把握することは到底できないとも論じている。ここに読むべきは、人格の中核にある強烈な欲動としての無（nothing）たるニーチェ＝フロイト的な「エス」ではないだろうか。すでに論じたように、これは表象不能な過剰な否定性を指し示していた。アナキスト的主体の中核には過剰な否定性たる無が存在することになる。

重要なのは、*The Secret Agent* において、自我の内部に潜む非自我なるエスの描写は、登場人物たちの無意味な行為だけにとどまっていない点である。自我の中の他者たる破壊的欲求を空間的にも、コンラッドは描いている。先に述べた通り、ロシア大使館は英国的なものではないにもかかわらず、ロンドンの中心に位置している。そして、英国から見れば他者たるロシアが英国人に破壊的行為を命じている。ヴァーロックはその指令に抗うことができず、テロ行為を実践した。言い換えれば、エスという破壊的なアナキスト的な虚無を人間心理とは別の表象として描写している。つまり英国という国家の中核には非英国的な暴力性が宿っていることになる。このようにコンラッドは、その語源的意味（中核の欠如）を意識しながら、その意味でのアナキズムをニーチェ＝フロイト的な「エス」に接続し、個人の心理ばかりか国家についてもその主題を展開している。

密かに力を及ぼす

今まで見てきたように、ヴァーロックやスティーヴィーの中核にはこうした無意識的なエスがあり、つまり自我の内部の過剰な虚無が彼らを駆動さ

せたと考えることができる。しかし、この自己の中核にあるエスは本来、意味の欠落したものであり、かつ恣意的なものであるため、グリニッジ爆破という動機不明の行為へと二人を駆り立てたのである。そして、この無意味なアナキスト的行為の中核にはこのような空虚があるばかりで、中心の欠落という語源的アナキズムがそこに読み取れる。つまり、アナキズム的行為の中核には語源的な意味でのアナキズムが同心円的に存在している。そして、この中心の虚無には、言語表現を超えた過剰な力が作用している。このように過剰に人を駆動する無は、定義上表象不能であるため、テキストにおいては中心の空虚としてしか表象できない。その存在が可視化されるのは、過剰なまでに破壊的で無意味な行為を通じてのみである。もしこの否定的で過激な空虚を表現するなら「それ＝エス」としか言いようがない、そのような力がテキストの中心において作用している。そして、この視点から作品のタイトルである *The Secret Agent* を再解釈すると、そこには「密かに（不可視なまま）効果を及ぼし作用するもの」という意味が見えてはこないだろうか。この意味はまさにフロイトのいうエスの作用と一致している。このような、心に作用を及ぼすもの、という語義での agent=作用因という語が際立っているのが、プロフェッサーが何も考えていない群衆たちを目の当たりにし、“The Professor’s indignation found in itself a final cause that absolved him from the sin of turning to destruction as the agent of his ambition” (65; 強調は筆者による)と嘆いている時の彼の心理描写である。彼の憤怒という、まさに否定的な力が野心の作用因として機能している、と解釈することができる。破壊的、かつアナキスト的行為の心理の中核には、こうしたエスのような作用因が密かに存在しており、それが可視化されるのは、無意味な行為を私たちが目撃するときなのである。

興味深いのは、『道徳の系譜学』でニーチェが“anarchie”(無政府状態)という言葉を用いて、上記のことに言及しているという点である。

俳優的な僧侶は、その不条理のもとで苦悩しつつ憤慨するという演技によって、大衆の憎悪があらためて爆発するように誘発し、こうしてまたしばらく苦痛の麻痺した状態が来るが、それも長くは続かない。このような激情の破裂と麻痺状態の反復によって、「畜群のなかでは、あのもっとも危険な爆発物であるルサンチマンが、たえず蓄積されつづける」のであり、その結果、「畜群の内部には

無政府状態と[.....]自己解体」の危険が迫ることになる。(163)

城戸淳は『道徳の系譜学』を上記のように理解している。ここでは、人生の意味について思考し、それは無意味であるという結論に至った人々に対し、欠落した意味を補おうと隠蔽工作に働いたキリスト教に対する批判をニーチェはしている。しかし、その偽装も長くは続かないどころか、畜群の内面ではルサンチマンが蓄積され続け、結果として無政府状態、つまり無秩序の状態に陥ってしまう。ニーチェのいう無政府状態とは、自己を統率することができない負の状態のことを示唆していると言っても良いだろう。そうした状態に陥るということは、*The Secret Agent* に関してこれまで試みてきた、no chief という語源的アナキズムの読解と合致している。自己を支配すべき自己がその中核に不在である無の状態は、自己の中心には何もないということであり、それは逆説的に無の状態がそこには存在していると解釈可能である。コンラッドはこのようなニーチェの無政府状態という感覚を、アナキストが実際に起こしたテロリズムへと接続させることで、不可視な人間の内面の虚無を可視化したのである。

存在論的無の行方

コンラッドがニーチェの影響を受けていることは数々の論者が論じているが、ディサントによれば、コンラッドはニーチェ哲学に対して両義的な立場をとっているのだと言う。

But Conrad also struggles with his sympathy and antipathy toward Nietzsche's ideas, some of which are uncomfortably close to Conrad's own convictions. The conflicted thought in the novels is an indication of Conrad's difficulty in writing about Nietzsche's ideas. (192)

コンラッドはニーチェの考えを半ば継承しながらも、その悲観的な側面を強調し、その視点から人間心理の不可知性を描写しようとしていたのではないだろうか。つまり、ニーチェの目指す超人思想と虚無主義思想といった二項対立が、このテキストでは後者に傾いている。先に述べたように、虚無主義に陥った人間への救済としてニーチェは『ツアラトゥストラかく

語りき』で永劫回帰を提唱している。超人となり、虚無を乗り越えるべきである、という思想がその根本にある。もしコンラッドがニーチェ哲学に対して賛同する立場をとっていたとしたら、超人のような登場人物が *The Secret Agent* にいてもおかしくない。しかし、このテキストでコンラッドは、不可視なまま過剰な作用因として機能する虚無を幾度となく言語的形象として前景化するばかりで、乗り越えるべきものとしての虚無を描いてはいない。それと同時に、中核の空無に意味を付与してその空虚を糊塗しようとはしていないように思われる。

その意味において、プロフェッサーが群衆を批判するシーンは極めて重要である。ロバート・ハンブソンが指摘する通り、彼は“complete nihilist”(112)とみなすことができる。以下の箇所がそれを例証する場面である。

They swarmed numerous like locusts, industrious like ants, *thoughtless* like a natural force, pushing on blind and orderly and absorbed, impervious to sentiment, to logic, to terror too perhaps. (65; 強調は筆者による)

虚無思想に陥っている彼は、群衆を“*thoughtless*”という言葉を使って批難している。しかし、群衆には考えがないと批判しながらも、プロフェッサー自身が何か思慮深いことを語ったりはしていない。それに加え、*nihilist* である彼も人生に意味などを希求しているわけではない。つまり、彼には *thoughtless* という状態を評価するような *thought* が欠落しており、いわばメタ言語がここにはないといえる。メタ言語の欠如は、プロフェッサー自身も *thoughtless* であるという解釈を可能にし、彼と群衆とが意味論的に重複しているのである。考えを持たない、いかなる意味をも求めようとしない群衆の中に、*nihil* (無)の権化たるプロフェッサーが紛れ込んでいるという描写は、ステューヴィの描く同心円的構造を想起させる。しかし、コンラッドはニーチェ思想を引用しながらも、虚無は虚無でしかなく、それを乗り越えたり、超人的に立ち向かうようなものではないと示唆している。その意味で、コンラッドはニーチェ哲学の中核を空無化（アナキ化）しようと試みている。

コンラッドは *The Secret Agent* において、中心の欠落という *anarchy* とい

う鍵語の語源的な意味を複数の言語的形象としている。そこにある過剰な虚無は、人々の内面の中核部において破壊的な力動性＝否定性として宿っており、抗うことのできない無意識として人を破壊的行為へと駆動する。ニーチェの論考を随所に引用しながらも、コンラッドはその中核を空無化することで物語を構築している。つまり、このテキストにおいて虚無主義的な描写というのは、乗り越えるべき何かという超人思想の対立項としてではなく、ただ現存する虚無として表象されている。虚無は虚無以外の何者でもない、というコンラッドの nihil (無) に対する姿勢は、彼の「我々の仕事は見せることだ」という言葉通り、否定的かつ破壊的行為としてしか認識できないような nothing を前景化するばかりである。コンラッドにおけるニヒリズムとは、nihil (無) を超えるいかなるメタ言語も持たない、究極のニヒリズムであると言えるだろう。あのスティーヴィの同心円のごとく、中心の無を志向するコンラッドの言語は、それ自体 (無) に決して到達することができないという、さらなる虚無に遭遇するしかない。

*本稿は日本コンラッド協会第5回全国大会(2021年11月6日)における発表を基調としている。

引用文献

- Conrad, Joseph. *The Secret Agent*. 1907. Penguin, 2007.
- DiSanto, Michael John. *Under Conrad's Eyes: The Novel as Criticism*. McGill-Queen's UP, 2009.
- Hampson, Robert. *Joseph Conrad*. Reaktion Books, 2020.
- Newton, Michael. "Introduction." *The Secret Agent*. Penguin, 2007.
- 城戸淳『ニーチェ 道徳批判の哲学』講談社、2021年。
- 互盛央『エスの系譜—沈黙の西洋思想史』講談社、2010年。
- 田尻芳樹「虚無の永久運動—「密偵」最終章を読む」『コンラッド研究』第2号 (2011年): 1-12 <https://doi.org/10.50823/conradstudies.2.0_1>
- フリードリヒ・ニーチェ『善悪の彼岸』、中山元訳、光文社古典新訳文庫、2009年。
- 『ツァラトウストラかく語りき』、佐々木中訳、河出文庫、2015年。
- 『道徳の系譜学』、中山元訳、光文社古典新訳文庫、2018年。

中核にある空虚

村瀬暁生『『密偵』におけるヴァーロックの挫折について』『大学院英文学研究会』17巻(1997年): 154-165.

<<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/36640>>

(たかはし りょう 成蹊大学大学院博士課程)